



内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局局長
西川 和孝 平成 14 年入省
東京 2020 大会に向けた組織委員会や関係省庁等の円滑な連携をサポート。鈴木俊一オリパラ大臣を支える事務局長の補佐も担当。

東京2020大会に
向かって走る
オリパラが持つ大きな可能性



スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課課長補佐
中平 公士 平成 16 年入省
オリンピック・パラリンピックムーブメントの推進（SPORT FOR TOMORROWの推進等）、オリパラ関係について、省内のとりまとめとともに、スポーツ団体等の外部機関との調整を担当。



東京オリンピック・パラリンピック組織委員会企画財務局企画課長
小林 美保 平成 14 年入省
東京 2020 大会の準備及び運営のために設置された組織委員会に文部科学省から出向。東京 2020 大会に向けたオリパラ教育の推進や、子供たちが大会に参画できる仕組みづくりを担当。



東京オリンピック・パラリンピック組織委員会企画財務局企画課長
中安 史明 平成 13 年入省
東京 2020 大会の準備及び運営のために設置された組織委員会に文部科学省から出向。理事会や経営会議の運営、組織委業務の進捗管理や総合調整等を担当。教育担当部長及び文化担当部長も兼務。



スポーツ庁国際課企画係長
出分 日向子 平成 25 年入省
スポーツを通じた国際交流・国際協力を担当。国際競技大会の招致推進、アンチドーピング活動も担当。

2020 年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「東京 2020 大会」）までおよそ 2 年。スポーツを所管する文部科学省は様々な形でこの世界的イベントに関わっています。今回、オリンピック・パラリンピック（以下、「オリパラ」）をはじめとしたスポーツ政策に、文部科学省職員として、また関係機関への出向者として携わっているメンバーが集まり、東京 2020 大会へかける想いを語りました。

「今日は文部科学省、内閣官房、そして東京 2020 大会組織委員会でそれぞれオリパラに関わっているメンバーに集まってもらいました。実際にどのような仕事をされているのでしょうか。」

中安：私が出向している組織委員会は東京 2020 大会の運営主体です。企画部長として、様々な業務に関わらせていただく中で、常に考えている点は、いかにして多くの人にオリパラに参画してもらうかです。例えば、大会マスコットは公募作品の中から小学生による投票で最終決定しました。結果として 7 割以上の小学校に参加してもらい、成功と呼べる経験となりました。当

初は懐疑的な見方をされることもありましたが、半年以上に渡り、教育行政・広報・マーケティングなどの様々な分野の出身の担当者たちと全力で取り組んでこられたのはとてもいい思い出です。今は子供たち向けの観戦プログラムや夏祭りでのオリパラ参画などもみんなと企画・推進しています。スポンサーや自治体だけでなく、学校や商店街の人々など、オリパラを通じて我が国の未来と一緒に盛り上げていこうとする方々との連携を目指しています。



小林：そうですね。競技会場がある自治体に限らず、全国の方々が参加し、一緒に創りあげているという思いを持ってもらえる「広がり」を大切にしています。私が担当するオリパラ教育では、学校、自治体、企業が連携して、子供たちが大会・スポーツの理念を学ぶ機会、大会に直接関われる機会の創出に取り組んでいます。

中平：小林さんのオリパラ教育と同じように、スポーツ庁でもオリパラの価値を国内に伝える取組を行っています。また、自国開催のオリパラがスポーツ実施率の向上に繋がって欲しいと思っているのですが、その際にはあわせてオリパラで目にする各国代表選手のように強度の高い運動だけでなく、日常生活における通勤や散歩、軽く体を動かすこともスポーツであるという意識を広げたいですね。

出分：スポーツを「する」だけでなく「みる」人や「ささえる」人が増えることも大切ですね。私の部署では国際競技大会の招致推進も担当していて、2019 年にはラグビーワールドカップ、2021 年にはワールドマスターズゲームズが日本で開催されます。2015 年のラグビー大会で五郎丸選手のポーズが話題となりましたが、見る楽しみもあると思います。オリパラや国際競技大会を通して、より多くの人にスポーツの価値を知ってほしいです。

西川：文部科学省の職員は基本的には教育、科学技術、文化、スポーツの視点で見ていると思いますが、私が所属する内閣官房の視点から見ると、東京 2020 大会のような大きな競技大会は、様々な裏方の仕事があることがよく分かります。人の輸送や、暑さ対策、医療体制、テロ対策等、あらゆる分野の検討をしなければなりません。これだけ大きな大会だからこそ、その準備に携わる役割の重要性を一層感じています。

「様々な立場でオリパラに関わっているんですね。東京 2020 大会で日本社会はどのように変わるのでしょうか。」

中安：1964 年の東京大会と前後して新幹線や首都高など日本の形が目に見えて変わりました。東京 2020 大会では、オリンピックも盛り上がるでしょうが、成熟した我が国にとってはむしろパラリンピックの社会的な影響が大きいのではないかと思います。大会をきっかけとして、高齢者や車いすの方も利用しやすいタクシーなど、バラの精神を踏まえたバリアフリー化が進むことを期待しています。

中平：確かパラリンピックが同一都市で開催されるのは史上初だったと思います。

小林：様々な障害のあるアスリートが工夫を凝らして限界に挑む姿から、社会全体がチャレンジする勇気をもたらったり「共生社会」が進むきっかけになればいいですね。

西川：組織委員会では IPC（国際パラリンピック委員会）の指針を基に、アクセシビリティへの配慮のための取組が進められていますが、政府全体でもオリパラを契機として様々な施設などでのユニバーサルデザインが進められています。これは、東京 2020 大会の大きなレガシーの一つですね。



ボッチャの日本代表選手と鈴木大地スポーツ庁長官

中平：そうですね。それに施設や設備等のハード面だけでなく、人の意識などのソフト面も重要で、高齢者や障害者、子供たちといったあらゆる人が暮らしやすい街を実現させるために「共生社会」の価値が大会を契機により多くの人に理解されるといいなと思います。さらに、鈴木大地スポーツ庁長官も仰っていますが、

東京 2020 大会をきっかけに国民のスポーツ実施率の向上に繋げ、その副次的効果として、国民の健康増進にともなう医療費の削減などの効果も出れば良いなと思っています。このように、東京 2020 大会が多様なレガシーを生み出す大会になれば良いと思うし、そのために今の自分ができる事をやっていきたいと思えます。

出分：2021 年のワールドマスターズゲームズは、おおむね 30 歳以上なら誰でも参加できる大会です。スポーツという割と若い人が注目を浴びることが多いですが、生涯スポーツのきっかけになったり、おじいちゃんが孫の尊敬を集めたり、スポーツにはそういう可能性があるとあります。

中平：大会後に急に社会が大きく変わるわけではないかもしれませんが、心のレガシーというか、あの頃から何かが変わり始めたね、という契機になればいいですね。

一色々な想いや願いを込めてオリパラの仕事をされているんですね。最後に、皆さんから受験生へのメッセージをお願いします。

西川：文部科学省、公務員を目指す人がどんな事にやりがいを感じるかは人それぞれではないかと思っています。私自身もオリパラの仕事に携わって初めて、これだけ多くの人と関わり、作っていくということへのやりがいを感じています。これまでは困っている人の問題を解決していくこと、日本の社会全体を前に引っ張っていくことにやりがいを感じていたけれど、文部科学省は広く、多様なやりがいを見つけられるのではないかと思います。皆さんには皆さんそれぞれのやりがいが見つけられる職場だと思います。

中平：私は好奇心旺盛な性格なのですが、文部科学省はそういう人に合う役所だと思っています。私は 10 数年の勤務の中で、教育・文化・科学技術・スポーツの 4 分野を 2、3 年ごとに異動しながら 1 回ずつ経験しています。携われる分野の幅広さは文部科学省の大きな魅力の一つだと思います。逆に言うと、この分野しかやりたくないという方は、他の道の方が良いかもしれません。やはり未来を創る仕事が多いところが、文部科学省の魅力かなと感じていますので、ぜひいろんな経験をして視野を広げてほしいと思います。

出分：実は私はこれまであまりスポーツに強い関心がな

かったのですが、実際に業務に携わってみたら、スポーツが秘めている大きな可能性に気づかされました。例えば国際交流の一環として一緒にサッカーをするだけで、人間関係が深まったり、言葉も何も必要なく、宗教等も越えて交流を深めることができます。そうしたスポーツの持つ可能性を皆さんにも感じてもらえたらと思います。

東京 2020 大会をきっかけに世界とのつながりや日本人としての誇りも感じてほしい。よく若者はバブル期の恩恵を受けておらず、豊かな日本を知らないと言われるかもしれませんが、東京 2020 大会を通じて、日本ってこんなにすごいんだって自分に誇りを持ってもらう、そういうきっかけづくりをしていきたいと思っています。

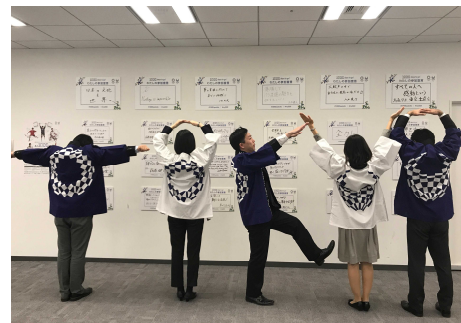


小林：東京 2020 大会をきっかけに日本の魅力を見直し、世界にどのように発信していくかと考える。世界の人たちと交流したり、地域の魅力を見直したり、みんながそうしたことに興味をもって積極的に参加していく社会が東京 2020 大会後に残ったらいいなと思っています。東京 2020 大会だけでなく、文部科学省の仕事はそんな日本を良くできる仕事が多くあると思います。日本を良くしていきたいと思っている人たちにとってやりがいのある職場であることは間違いないので、熱い気持ちを持った人にぜひ来てほしいと思います。

中安：組織委員会の企画部長として、オリパラに中心的に関わることができ、嬉しく思っています。文部科学省ではそうした物事を中心で活躍できる場が多く与えられると思います。また、文部科学省の仕事は多くの人と関わる仕事であり、いかに人に正しく伝えるか、どうやって多くの組織に影響を与える意思決定をしていくかということが求められます。私は今、組織委員会で民間の方や東京都、他省庁の職員と仕事をしてい

ますが、文部科学省で培った仕事のやり方がとても役立っています。自分を鍛えてくれる場としても良い職場だと思うので、ぜひ仲間になっていただければと思います。

—お話を伺って、オリパラを機に日本が明るく前向きな方向に変わっていくと感じました。本日はありがとうございました。



—こぼれ話①：過去のオリパラで印象に残っているシーンはありますか？

西川：97 年バルセロナオリンピックの水泳での岩崎京子選手が印象に残っています。中学 2 年生で金メダルを取った時は衝撃でした。同世代なのにすごいなと思いました。その後の大会でも冬季のフィギュアスケートなど若くから活躍する選手が多いのが印象的です。長野五輪のスキージャンプでの原田選手や船木選手の活躍も印象に残っています。

中平：リオ五輪で日本男子が 400m リレーで銀メダルを取ったときですね。日本人が陸上競技でそのような成績を残せるのはすごいと思ったし、時代が変わった気がしました。また、多くの人が印象深いシーンに挙げられると思いますが、ソチ五輪の時のフィギュアスケートで浅田真央選手がショート失敗からもちなおしたときのフリーの演技ですね。いくつもオリパラを見てきましたが、やっぱり時々の大会で思い出すシーンはあるなと思います。

—こぼれ話②：オリンピック・パラリンピックに関わる仕事をしていて役得だなと思ったことはありますか？

中平：先日、鈴木大地スポーツ庁長官が平昌五輪の聖火ランナーに選ばれて、随行した際、フィギュアスケー

トの荒川静香さん、高橋大輔さんに会えたことです。**西川：**裏方からオリパラを見られることです。例えば、選手村での食事の基準や障害者への配慮、金メダルの金の含有率など、初めて知ったこともあり、面白いなと思います。

中安：組織委員会は自国開催のオリパラの中身を決めていくことができるので、業務として関わることができるのがまさに役得です！



東京オリンピック・パラリンピック組織委員会 室伏スポーツディレクターと